36・48・60・72・84・96子　にゅういやあエッセイ

□ 妖怪を訪ねて三千里

須高　北　村　　豊（72歳）

思いもかけぬ水木しげるさんとマレー半島のジャングルに約１週間の旅に行ったのは、平成６年（1994年）の２月末であった。

この旅のきっかけは、マレー半島先住民の“夢の文化”を調査していたノンフィクション作家の大泉実成さんを、私がかつて青年海外協力隊員として３年間を過ごした地域のジャングルに、すでに二度も案内していたからであった。

大泉さんから、「ジャングルは精霊の宝庫である！」ことを告げられた水木しげるさんの“こころ”に火が点いてしまったのであり、もちろん放火の「確信犯」は大泉被告であって、私は幇助罪にもあたらないと信じているが…。

同行とは言っても、ラバウル戦を経験した水木さんを除いては、何となくコンクリートジャングル慣れした３人を気温33度前後、湿度90％近い熱帯で私の知り合いの先住民を頼って宿を確保し、朝から夜まで案内やマレー語の通訳をするのは私にとっても大仕事であった。

私はTシャツ、短パン、ビーチサンダルの軽装なのに皆さんは、登山グツに長ズボン、という出で立ちなのには、失礼ながらつい笑いが込み上げてきたほどであった。

私は、テレビ番組作製でもジャングルにスタッフを案内したこともあるが、「日本人という人種」が、不慣れなジャングルなどの環境でどんな行動や発言をしたり、どのように感じるのかを知るのは、私にとっては非常に興味深く、その人の思考回路や異文化に対する日本人？の適応性も見えてきて、とても面白い。

水木しげるさんとの珍道中については、さすがノンフィクションライターである大泉さんが詳細に厚いノートにメモっていて、帰国後に２冊の本が出版された。大泉さんは、講談社のノンフィクション賞を受賞し、亡き有名なジャーナリストの筑紫哲也さんにもその能力を絶賛されたほどの実力者であり、マレーシアから帰国後に出版された本も絶妙な筆致力には惹きつけられたが、恥ずかしながら私の行動、言動が秀逸な“大泉偏光グラス”を通すと、このような記述になるのだ！と感心したり、恥じたりしたことを思い出す。

ここで「水木しげるの妖怪探検―マレーシア大冒険」（講談社文庫・1999年）より少し転載させていただいく。

そして、今回も通訳にコーディネーターにと大活躍だった北村先生を水木さんは賞讃し、

「北村先生はマレーの宝です」　とまで言う。
「北村先生みたいな人は、初めてです。なにか、底なしの井戸みたいな（と言って長い間、皆思い当たるところがあって笑い転げる）普通のつるべじゃ汲み切れないです。
動きも特別です。精霊のような動きです。
先生は、ナニカ本格的なアルモノ、ですよ。『狂』の字がついとるわけです。現代の熊楠かもしれません」
怪物は怪物を知る、というところか。

午後二時二五分雨やまず。
川を越えた急斜面の崖の上に、バンブーハウスが一軒ポツンとあるのだが、水木さんと北村先生はそこに行っているという。水木さんはどうやってあの崖を登ったのだろうか。ありゃしんどかろう。
午後三時五十分。水木さん帰ってくる。
大泉「先生、どうやってあの崖を登ったんですか？」
水木「あそこには絶壁があったですよ。もうダメかと思いました」
北村「僕がちょっとお尻を押したり、引っぱったりして、なんとか」
水木「思い返すとエラかったです。もしスベったら『死』でしたよ」
大泉「でも良かったじゃないですか。水木先生は『断崖絶壁じゃないと冒険じゃない』とおっしゃってたんだから。これで十分堪能なすったでしょう」
水木「ああ。言わなきゃよかった、そんなこと」

ストーカー？から逃れられた私と水木しげるさんは崖上の家で出会った巨大なタケネズミの子供に出会うことができ、幸福度は最高潮に達したのであった。

今年の干支でもあるネズミの子供を抱きかかえた水木さんの笑顔は、まさに孫をいとおしく思う好々爺そのもので、この時の旅行中で見せた最高の笑顔であった。

人生の旅は広ければ広いほど面白い！そのためにもそろそろ各種の会からの卒業も考えなくては……。